

まい 埋やち

No.23
千葉県八千代市
埋蔵文化財通信

2010. 1.29

川崎山（かわさきやま）遺跡特集②（縄文中期の集落）

以前、萱田町の川崎山遺跡の特集（埋やちNo.12）を行ないましたが、その後、新たな調査例、報告書も刊行されていることもあり、今回は、川崎山遺跡特集②として更なる紹介をしたいと思います。

【川崎山遺跡の位置】 川崎山遺跡は、八千代市の中央部、萱田町に所在します。市民会館の前の道路を隔てた南側一帯が遺跡の範囲にあたります。標高は22m～23mで、遺跡の東側には新川が流れ、西側は池の台遺跡や白幡前遺跡が連なり、今はゆりのき台の町並みとなっています。

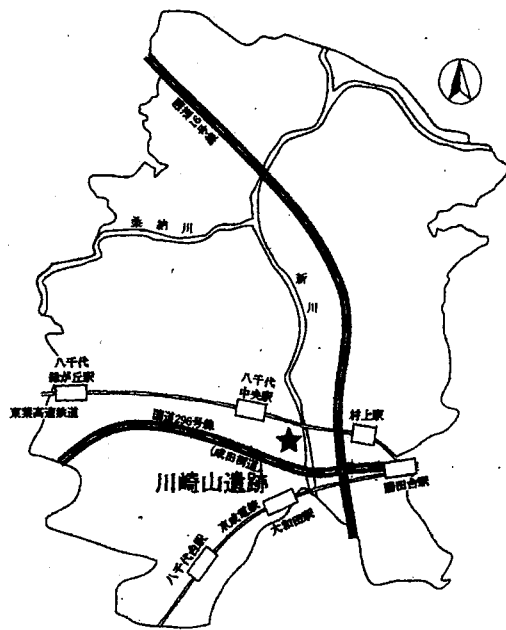
【遺跡の概要】 川崎山遺跡は旧石器時代～近世に至る複合遺跡で、市内で最も調査例が多い遺跡で、これまで、a地点～o地点の15地点の調査が行われてきました。それぞれの地点の場所や調査されたものは、表や地図のとおりです（次ページ参照）。これまで遺跡の東側が多く調査され、中心となる時期は弥生時代後半～古墳時代中ごろと考えられてきました。ところが、最近、遺跡の西側にあたるm地点の調査が行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡が発掘され、これまでの川崎山遺跡の調査では見つからないものも出土しました。m地点の縄文時代を見ていきたいと思ひます。

まず、縄文時代の早期ですが、早期中ごろの沈線文系土器と呼ばれる土器が出土し

年表

縄文時代						弥生時代	古墳時代	
早期			前期	中期	後期	晩期		
前半	中盤	後半						
9000年前	8000年前	7000年前	6000年前	5000年前	4000年前	3500年前	3000年前	1700年前

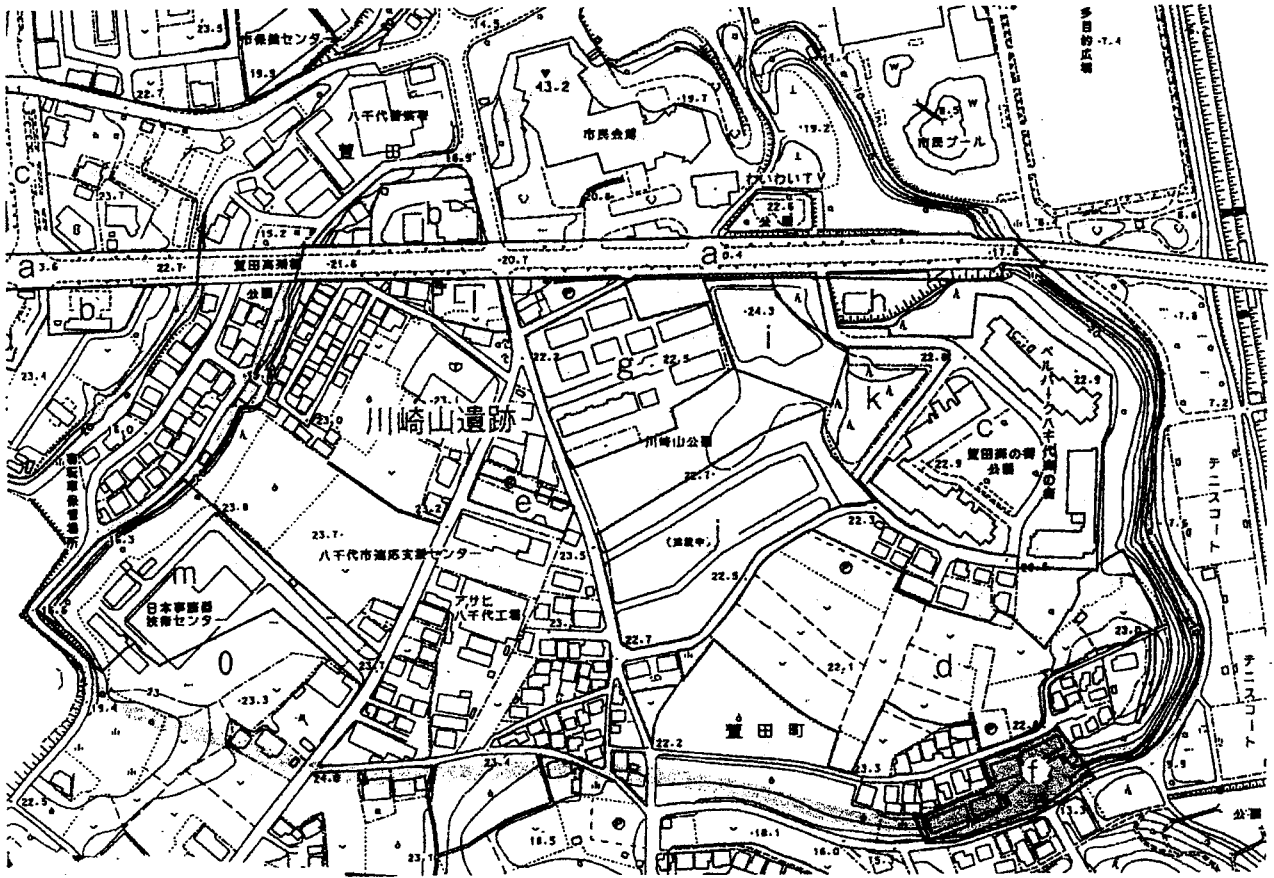
※ 時代区分には諸説あります。



ているので、この頃から人々が遺跡周辺を行き通うようになったのでしょうか。前期の土器も見つかっています。時期は明らかではありませんが、獣を捕獲するための縄文時代の落とし穴も1基、見つかりました。

そして、中期になると竪穴住居跡が見つかるようになります。見つかった竪穴住居跡は、中期の中でも前半期にあたる阿玉台式土器が出土する竪穴住居跡でした。

【阿玉台式土器】 阿玉台式土器は、関東地方東部に広く分布する縄文時代中期前半の土器で、土器に雲母片を含むことが多く、器面がキラキラしている特徴的な土器です。文様の特徴などからIa期、Ib期、II期、III期、IV期の5段階に細分されています。

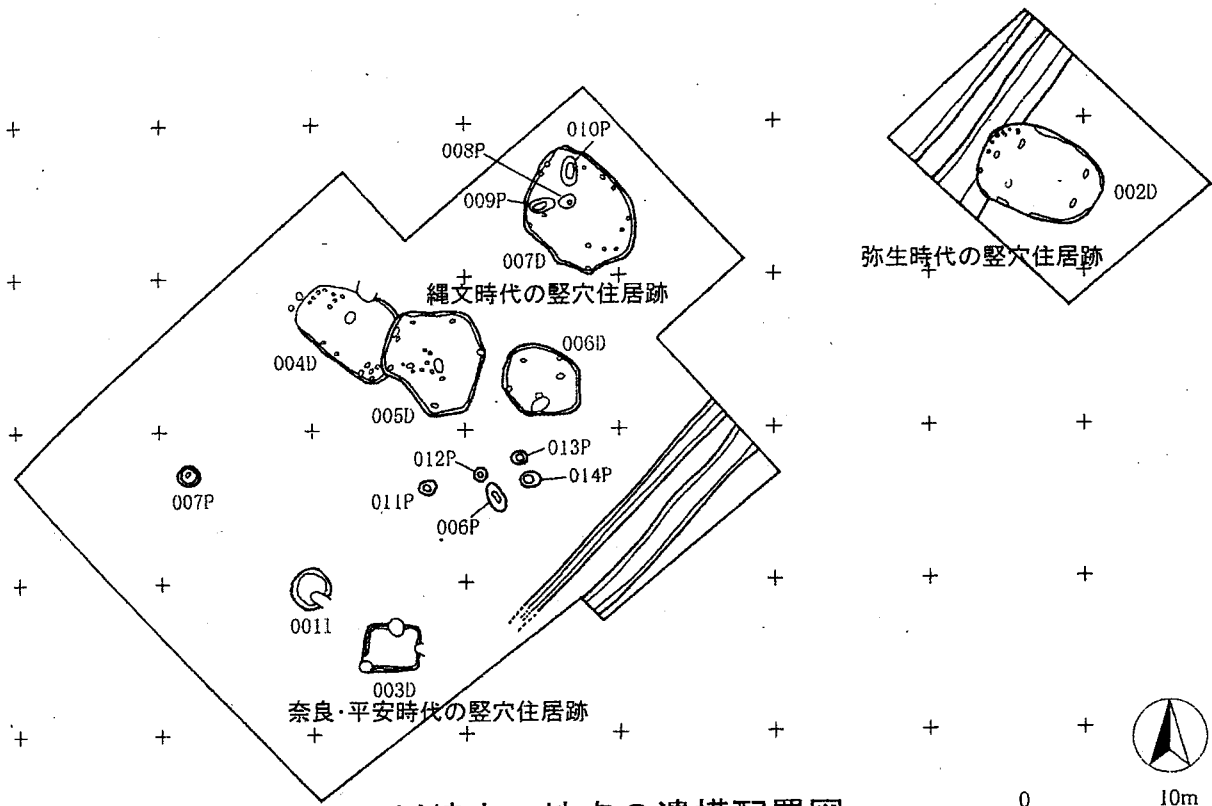


川崎山遺跡の遺構概要

	縄文時代	弥生時代	古墳時代			奈良・平安時代	住居跡合計
	住居 (落し穴)		前期	中期	後期		
a地点	0(0)	4	0	3	0	0	7
b地点	0(1)	0	0	0	0	0	0
c地点	0(13)	13	10	27	2	2	54
d地点	0(17)	5	19	1	0	1	26
e地点	0(1)	0	0	0	0	0	0
f地点	0(0)	0	0	0	0	2	2
g地点	0(4)	0	0	0	0	0	0
h地点	0(0)	3	0	2	1	0	6
i地点	0(0)	0	0	0	0	0	0
j地点	0(3)	0	0	0	0	0	0
k地点	0(0)	1	0	0	0	0	1
l地点	0(0)	0	0	0	0	0	0
m地点	4(1)	1	0	0	0	1	6
n地点	0(1)	2	0	2	0	0	4
o地点	0(0)	0	0	0	0	0	0
合計	4(41)	29	29	35	3	6	106

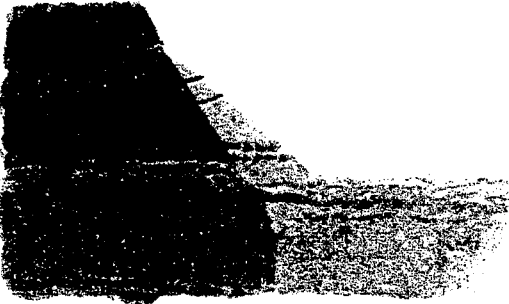
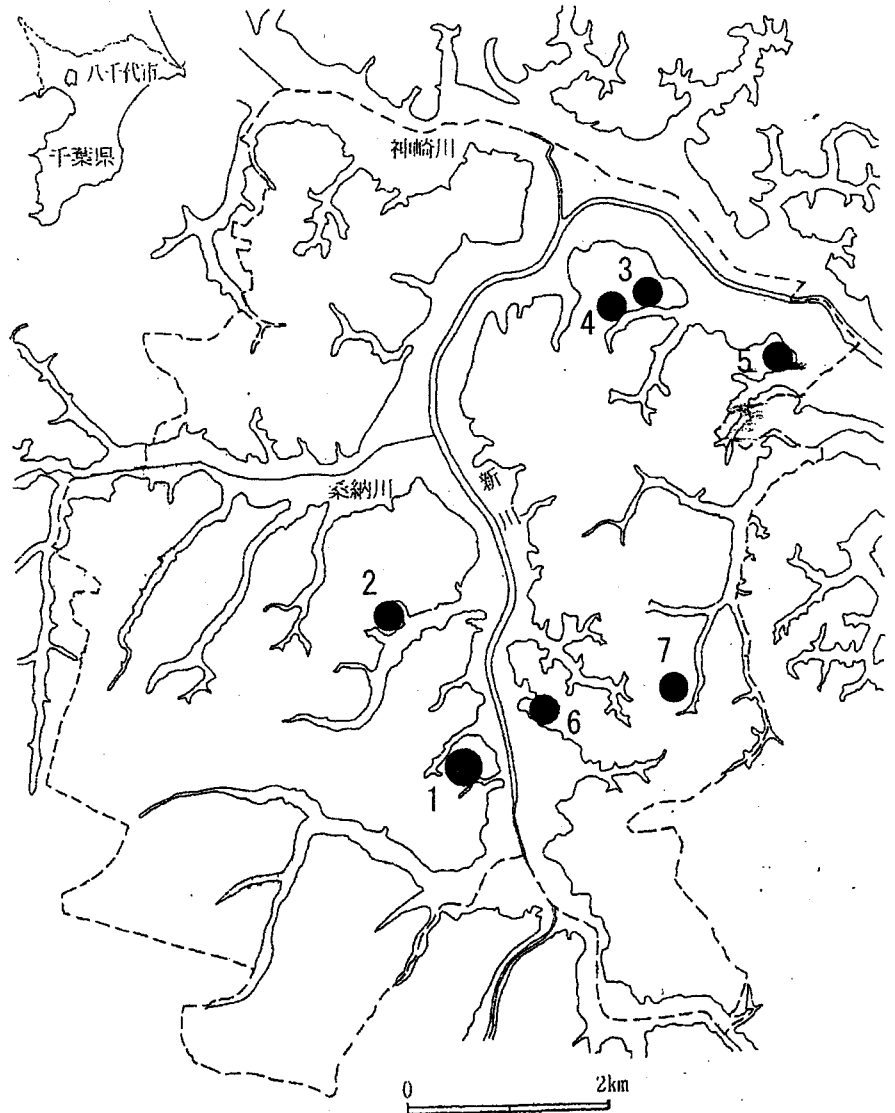


川崎山遺跡m地点05D出土縄文土器 (阿玉台式)



川崎山m地点の遺構配置図

- 1 川崎山遺跡 m地点
- 2 フサル山南遺跡
- 3 境堀遺跡
- 4 向境遺跡
- 5 おおびた遺跡
- 6 浅間内遺跡
- 7 上谷津台南遺跡



おおびた遺跡出土 阿玉台式土器

角押文が2列あります

八千代市内の阿玉台式土器を出土する主な遺跡

縄文土器とは言いながら、縄文が使われることが少なく、阿玉台式土器でも終わりの頃にはじめて縄文が使われることも興味深い事柄です。

文様は、^{かくしもん}角押文と呼ばれ、棒状の工具で粘土を小刻みに押し引きして描き出す技法が特徴として挙げられます。この^{かくしもん}角押文が1列の段階がIa期、Ib期、2列の段階がII期にあたります。Ia期の段階は、更に、土器の内側に彫刻文と呼ばれる、あたかも彫刻刀で刻印したような模様があることを特徴とします。

〔阿玉台式期の川崎山遺跡〕 これらのことから、川崎山遺跡^m地点の阿玉台式土器は、阿玉台Ia期の段階であることがわかりました。また、これらの土器を出土する竪穴住居跡も阿玉台Ia期の段階の住居跡ということになります。

川崎山遺跡^m地点では、阿玉台式期の竪穴住居跡が4軒、発掘調査されました。^m地点の隣に位置する^o地点では、阿玉台式期の竪穴住居跡も土器も出土しなかったもので、^m地点の集落は、同時期には1～2軒程度の小規模な集落であったと思われます。どの竪穴住居跡も形は不整形で、掘り込みの浅い竪穴住居跡でした。また、^{なてあなじゅうきょ}竪穴住居跡には、^い炉（いろり）の痕がありませんでした。住居の中に炉が定着するのは、阿玉台式期の次の時期で、縄文時代中期でも後半になってからのようです。

阿玉台式期を過ぎると川崎山遺跡の縄文文化は、急速に姿を消してゆきます。再び、遺跡が活気を取り戻すのは弥生時代の後期になってからのことになります。

〔八千代の阿玉台式期の遺跡〕 阿玉台式土器を出土するその他の八千代市内の遺跡についても少し触れたいと思います。市内では他に、大和田新田地区の^{きさるやまみなみ}ラサル山南遺跡、神野地区の^{むかいさかい}向境遺跡、^{さかいぼり}境堀遺跡、保品地区のおおびた遺跡、村上地区の^{あきまうち}浅間内遺跡、上高野地区の上谷津台南遺跡などがあります。遺跡の立地の一般的な特徴としては、河川に面した小高い台地の先端部に立地することが多いのですが、阿玉台式土器を出土する^{さかいぼり}境堀遺跡、^{むかいさかい}向境遺跡、^{きさるやまみなみ}ラサル山南遺跡などを見ると、河川に対して台地の奥まった所で、しかも、谷に面しているところに立地しています。川崎山遺跡は、本来、新川に面した小高い台地の上に展開する遺跡ですが、^m地点に関して言えば、新川から離れ、しかも、小さな谷に面している地点であり、^{きさるやまみなみ}ラサル山南遺跡などと立地が同じであると言えます。このことが、偶然なのか、何か理由があることなのか、今はまだ、はっきりとは判りませんが、将来、発掘調査が多く行なわれれば、明らかにされるのかも知れません。

(宮澤)



—編集後記—

23号の刊行が大幅に遅れてしまって申し訳ありませんでした。次回は、平成21年度をふりかえってをお届けします。

埋（まい）やちよ No.23

—千葉県八千代市埋蔵文化財通信—

平成22年 1月29日

編集・発行 八千代市教育委員会

教育総務課 文化財班

八千代市大和田138-2

☎276-0045 ☎047(481)0304